

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会だより

第1号 2003年5月30日

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

連絡先： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

広報誌創刊にあたって

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会 会長 篠崎 将

「名戸ヶ谷湧水ビオトープを育てる会」が発足して早くも3ヶ月になろうとしています。はじめての組織ということで、会則づくり組織づくりから始まって暗中模索が続きましたが、幹事さんはじめ、会員のみなさん、環境保全課の担当者の精力的な努力により、年度計画もでき、軌道に乗ってきました。

振り返ってみますと、平成13年度に学識経験者、市民代表、行政による「柏・水環境プラン改定検討会」が組織され、柏・水環境プランの改定の中でどのようなビオトープをつくるかが検討され、「水辺のネットワーク形成と環境学習」として現在のビオトープ構想ができあがり、名戸ヶ谷湧水ビオトープの整備計画がスタートしました。

さらに、平成14年度には、このビオトープをどのように活用していくかを検討する「名戸ヶ谷湧水ビオトープ活用運営委員会」が組織され、学識経験者(3名) 地元町会長(名戸ヶ谷町会、亀甲台町会)、小学校(名戸ヶ谷小、土小、八小)、市民(4名)により検討が行われました。その結果、市民参加による活用、管理の組織づくりという方針が決まりました。

まだまだ今年度中は試行錯誤が続くと思われませんが、苦勞を楽しみに変えて、会員のみなさんと共に、余暇を楽しみながら、自然保護を考えていきたいと思えます。

生きもの部会



4月29日(火) 10:00~11:30 おたまじゃくし観察会を行う

講師 柄澤 保彦先生 (野田市立岩名中学校教諭)

参加者 会員 23名 名戸小児童(4年生) 約20名 保護者 十数名

アカガエルは大半が成体になっており、おたまじゃくしは少なかった。シュレーゲルアオガエルはとてもきれいな声で鳴き返していた。産卵には少し時期が早い。昨年までたくさん見られたオニヤンマのヤゴは1匹も確認できなかった。誰かが採っていったか、ザリガニに食われてしまったのかもしれない。多くのトンボは産卵から成虫になるまで1年であるが、オニヤンマは3~4年かかるそうである。今度見られるのは、早くて3年後かと思うと少し残念に思う。ほかに蛍の幼虫が好んで食べるという小さな巻貝(カワナナ)。めだかに似たカダヤシという小さな魚。

ザリガニはトンボだけでなく他の水生生物にとっても脅威である。適切な生態系を守るためにはザリガニを減らす必要があるとのこと。近いうちに名戸ヶ谷小学校でザリガニつり大会を計画する予定。この観察会では幾種類かの植物も見ることができた。ナズナ、セイヨウタン

ポポ、イヌスギナ、タネツケバナ、クレソン、ガマ等々。今回の観察会は子供たちの参加も多くたくさんの質問があったのが印象的である。

(中村正照 記)



観察会で説明する柄澤先生

水田稲作部会

3月21日に活動区域の現地確認を行い、4月6日(日)に6名の参加で水田の畦作りを行った。湧き水を導く水路作りも3部会合同で行い、気持ちのいい汗を流した。5月2日(金)には田植え準備の代かきを3名の参加で行い、有機肥料については今回は散布を見送り、今後の稲の生育を観察しながら検討することにした。3年間休耕し、雑草が多かったからである。

5月8日(木)の田植えは午前10時30分から部会員10名の他に名戸ヶ谷小関係76名(5年生72、先生3、保護者1)の参加の下で実施した。生憎の雨のため生徒は途中終了とし、部会員が残りの作業をすすめて

12時過ぎに全て終了した。小学校からの田植えに対する要望に合わせたため今回は平日実施となったが、多くの会員のみなさんも参加できるような日程を今後は検討したい。

今後の予定としては水の管理の定期的実施の他に、肥料の散布、田の草取り(6月上旬、7月上旬予定)、畦の草刈(6月上旬、7月上旬)、稲刈り(9月)、収穫祭(10月)を考えている。(小岩井勇)



不耕起稲作部会

1. はじめに

不耕起栽培とは、字が示すように、耕さないで稲作りをする方法です。農地以外では、耕すことをしなくても草木は成長しています。こうした自然の循環を岩澤先生が稲作りに採用したものです。また、水田は収穫時以外は10cm以上の水深を保ち、収穫後に「藁、粃、糠、米粉」を田に戻すと、そこには藻類が繁殖する。藻類の繁殖は植物連鎖を生み、水田の肥沃化につながるばかりでなく、多くの動物の餌にもなり、水田は昔のように生き物でいっぱいになります。こうした水田に育つ稲は野性的となり、肥料もあまり要らず、農薬を使わなくても害虫に対して強くなります。結果として、環境改善と安全で美味しいお米が得られます。

2. これまでの作業

3年に亘る休耕田整備のスタートにあたり、機械を使わず、すべて手作業で取り組みましたが、ガマの除去が大変でした。雑草の生長は早く、一度整備した所も、一週間も過ぎるとまた元の一面の雑草となります。畦の改修の仕事もなかなか大変でした。不耕起栽培では常に10cm以上の水深を保つ必要があるため、高い畦が必要なためです。この水田の土は粘りがあり、深くぬかり、移動が大変でしたが、経験のない方が多いにもかかわらず、みなさん本当によく頑張りました。毎週2日は作業日でしたが、子どもの泥んこ遊びのように楽しみながら作業を続け、5月16日の田植えテスト、17日(日)の本番の田植えで、水田は見事、美しい姿になりました。



3. 今後の予定

・水管理

今後、常に10cm以上の水深が保たれるよう、各田んぼのバランスを見張りながら、水路の改善を含めて、工夫しながら管理していきます。

・追肥(藁・粃・糠・米粉・肥料)

3年間に亘る休耕田であったことから、田植え前の肥料は与えておりません。稲の成長を観察しながら必要に応じて追肥を施します。佐原市の岩澤先生、藤崎さんと相談しながら進めます。

・草取り

休耕田であったこともあり、雑草が心配です。

特に、ガマが取り残した根から出てくると思います。その時には、水田に入り、カマと手による草取りが必要になります。これは収穫時までには時々必要でしょう。

・稲の病気と害虫対策

一般の水田では農薬を使って害虫と病気対策を行います。我々は農薬を使わず、生き物に優しい米作りを目指しています。一年目は厳しいと思いますが、観察を怠らず、先生とも相談しながらすすめます。

・収穫

収穫は9月下旬頃の予定です。一年目は多くを期待しないで、学習の一年ですが、期待して頑張りましょう。

・その他

田植えまでは余裕がなく、部員の懇親の場を設けられませんでした。これからは田植え完成祝いをはじめとして、毎月一回を目標に懇親会を開き、水田の中以外での特技発見を楽しみたいと思います。

(才川 寿麿 記)



ホタル部会

街のなかでホタルが飛び回るピオトープを

「名戸ヶ谷の地域は30年前にはホタルがどこにでもいて、飛び回っていた。でも、今はもうホタルを見ることができなくなった・・・」と嘆く人ばかりです。ところが、昨年8月に名戸ヶ谷で自然発生して、数百匹が乱舞しているコロニーがあることを発見しました。こんなに都市化されている場所でも自然発生しているホタルの棲息地があったのです。そのことから、名戸ヶ谷のピオトープにも、いつの日かホタルが飛び回り、子どもたちが喜び、大人たちも楽しめるようなホタルの棲息地を回復したいと考えております。あのホタルの美しい光に誘われるピオトープを街中に回復したいとの願いで活動をしたいと思っています。

ホタル部会では次のようなことを中心に今年は活動に取り組んでいく計画です。

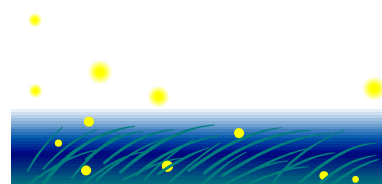
ホタルが棲息できる水路を造る(3月30日、4月6日に実施)

カワニナを飼育する

ホタルの採卵・育成をする

ホタルができるだけ自然で育つよう、光害を少なくする対策をたてる

カワニナ、ホタルの育成に適した環境整備をすすめる(松本 徳重 記)



編集後記

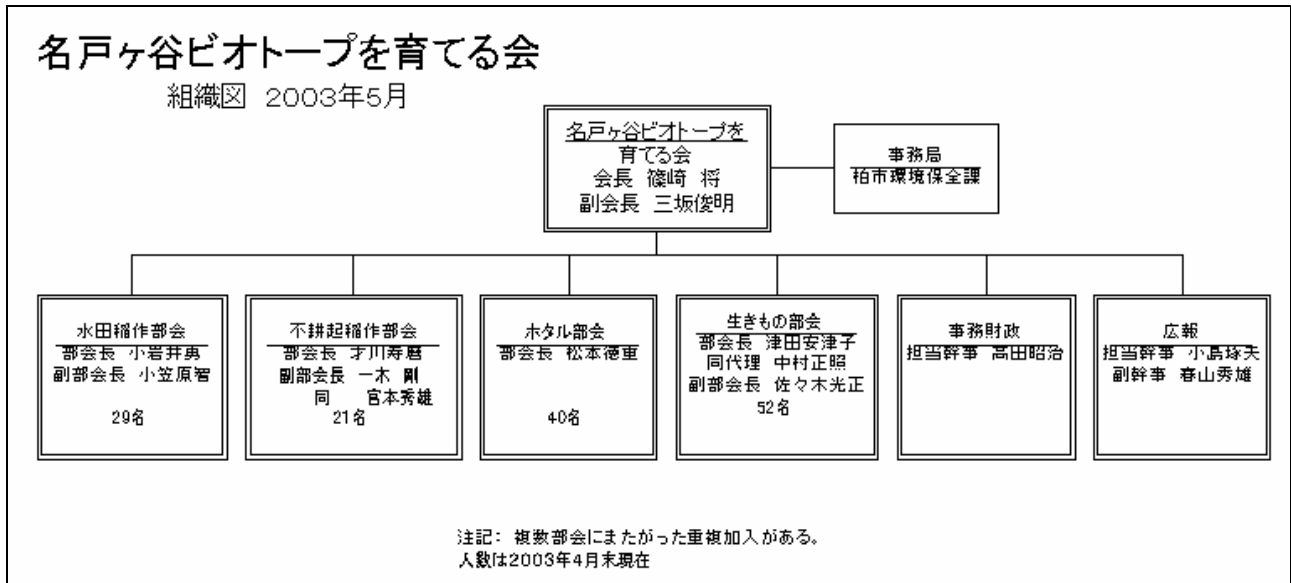
「名戸ヶ谷ピオトープを育てる会だより」第1号をお届けします。発行にあたり、各部会の幹事・副幹事さんをはじめ、市の環境保全課の担当者、各部会のみなさんからご協力をいただきました。ありがとうございました。タイトルは仮称ですので、よい名称がありましたら、広報担当までご提案ください。尚、編集の都合上、原稿を一部修正いたしましたので、ご了承ください。

ニュースは原則として隔月発行を考えております。今回は第1号ですので、会長、各部会長等からこれまでの経緯、今後の予定などを書いていただきました。ニュースには行事の案内、事後の報告をはじめ、ピオトープ内の生物の紹介、また会員からの感想や声なども掲載したいと考えております。

尚、付属資料として、ピオトープを育てる会の組織図、5月23日付朝日新聞(朝刊、千葉版)で取り上げられた「不耕起栽培」の記事を参考までに紹介します。また「水田稲作」(5月8日)の田植えの様子は16日付産経新聞(千葉版)に掲載されていることも付記します。

広報担当 春山秀雄・房子

ビオトープを育てる会の組織図



5月23日 朝日新聞朝刊(千葉欄)

動植物共存する 水田取り戻そう

土耕さずに田植え 柏の「名戸ヶ谷ビオトープ」

田を耕さずに水田を育てる「不耕起栽培」で、水田にメダカやトンボ、ドジョウなどを呼び寄せ、また、柏市名戸ヶ谷の「名戸ヶ谷ビオトープ」で有蓋田植えをした。さまざまな動植物が共存している。昭和初期の田圃環境を取り戻すのが目的。

名戸ヶ谷ビオトープは、柏市が水田生態系を復元しようと、市有地のほか民有地を一部借りて約1千平方メートルを確保した。今年2月に築足した「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」の約100人がここで活動している。田植えは約40人のメダカやトンボ、水鳥などが生息する水田を作ろうと、苗を植え込む人たちが、柏市名戸ヶ谷で

水を流せる「代かき」は少ない。知り残した稲の切り株やわらが水に浮かんでプランクトンが繁殖し、水田にメダカやトンボ、水鳥などが生息するようになるという。

化学肥料や農薬を使わないため、環境農法として新潟や徳島、秋田などで注目されている。「育てる会」会長の篠崎将さん(55)は「取組目的だけでなく、捨てられるものを活用し、生き物が生息しやすい環境をつくらなければならない」と話している。

市民ら管理「不耕起栽培」メダカやトンボ・水鳥住みやすく



メダカなどが生息する水田を作ろうと苗を植え込む人たち＝柏市名戸ヶ谷で